

により解釈しようと試みた。幼児に対し、自由に神あるいは仏の絵を描くことを求め、更に自分をも描き入れてもらったが、その表現法は多種多様で、おおよそ次のように分類してみた。

神観においては、雲上にある神様を表現した者が二八、三%で最高位を示し、普通人と同じ表現をとった者が一五、五%で、偶像や偶話の神を描いた者が一二、八%、神棚を描いた者が一%となっている。

仏観の絵について分類した場合は、仏壇を描いた者が圧倒的に多く四〇、五%という高率を示し、続いて偶像が二〇、八%、普通人の表現をとった者が一〇、六%となっており、雲上の仏は三、九%にすぎない。

「神様は誰がなるか」に対する解答は各園共に偉人と答えている者が多く三五%を示し、死人と答えた者が二八%だった。その他の解答群では、イエス及び天使というのが、キリスト教立の場合に限られている。

また「仏様は誰がなるか」に対する解答では、死人というのが最高位で三九%で、偉人は僅か一、八%、その他は石とか、おじいさん、おばあさんといった解答だった。

「神様と仏様とが同一品格であるかの間に対しては、違うという答は五才児一八七名中一三八名で、これは仏観においても同様の傾向を来たしている。

以上の調査によってみると、神仏に対する幼児の観念は、自然発生的に宗教感情が芽生えるということは、あまりなく、主として身近かなものへの敬慕と信頼につながっていることがわかる。次いで生活環境や家庭教育が第二義的役割を果たしていることがわかる。

幼年期における道徳性の形成

広島大学

田代高英

道徳は人間が社会の一員として生きていく上に欠くことのできないものである。しかし、この道徳性の形成を人間の成長発達段階で考えるとき、最近の教育学者、心理学者、社会学者のいずれを問わず、幼年期において基本的な方向が決定される、という点で見解を同じくしている。

たとえば、フリードランダーによれば、二才の子どもと八才の子どものもつとも重要な相違点は、良心や道徳性の問題であるといわれる。二才の子どもは自分の行動を単に快、不快でしか判断することができないが、八才の子どもになると、たとえ行動はともなわなくても、すでに何が正しく、何が間違っているかを知っている。

このような点から、われわれは良心や道徳性の基本的な形成期を二才より八才の間と考えることができよう。

この間における幼児の発達を考えると、まず道徳性の形成の最初の芽生えは、模倣というかたちで現われる。幼児は早くからおとなの言動をまね、それによっておとなの社会を支配している社会的規範を理解するようになる。

次には両親の要求や願いにたいする同一化ということが考えられ

る。

この時期の子どもは自分の要求に反しても母親の要求や願いを自己のものとしてとつとめる。こうして母親の要求にたいする同一化は幼児の内的な衝動の変容をきたし、良心の所有に一步近づくのである。

こうして次第に幼児が成長し、五才に達すると幼児は両親が近くにいかなくても、何が自分に要求されているか、自分勝手に行動することが決して良い結果を生まないといったことを知るようになる。これは、両親の抱いているイメージあるいは理想、希望などとの同一化、あるいはその内在化ということが出来る。

こうした幼児のなかでの自己の要求と親の要求の対立、あるいは愛と憎しみの対立はいわゆるエディプス・コンプレックスを生じ、このようなコンプレックスのなかで幼児は両親にたいする憎しみの感情と、両親にたいする願いの故に、罪の意識を感じるようになるのである。

ここに、良心あるいは審判原理としての上位自我が形成され、これがそのひとの一生を通じて基本的な道德原理として支配するのである。

それ故、この時期における両親、あるいはその他の幼児を取り巻く環境条件は、幼児の将来にとって大きな影響力をもつということができよう。

* * * * *

幼児期の道德教育について

——ベスタロッチーと

フレーベルを中心として——

広島大学大学院

猪 岡 武

云うまでもなく、宗教・道德の教育は、それぞれの意識の発展をその目的とするのであるが、ベスタロッチーはそれらの意識の本質を、愛と信頼と感謝と従順であるとした。そしてこれらの感情の最初の芽生えは、主として幼い子どもと母親との間に起る関係から生じてくるのである。かくして生じてきた諸感情は次第に成長し、そしてそれらが融合して、良心の最初のきざしが芽生えてくる。最初は母と子との本能的な感情の交流によって生じてきたこれらの感情が、やがて次第に母以外のものにまで、遠く広く及んでいくのである。

フレーベルの場合も同様である。すなわち宗教心や道德性は、母が幼児と遊んだり、遊戯をしたりする時に養いはぐくまれる。子どもが、神と自然と人間とのつながりを自覚した母や教師と遊戯をする時、彼は知らず知らずのうちに、すべてのものは調和のとれた一つの大きな共同体である、ということを感じ得し、したがって次第に人を愛し、人に感謝するようになる。

道德性が、個人並びに社会にとつて不可分のものとなり、それが